不遇の人 鷗外

日本語のモラルと美

小堀杏奴

遇の人鷗外

小堀杏奴

求龍堂

不遇の人　鷗外

第一刷　昭和五十七年七月九日発行
第二刷　昭和五十七年九月十五日発行
著　者　小堀杏奴（あんな）
発行者　足立龍太郎
印　刷　株式会社熊谷印刷
製　本　大口製本印刷株式会社
発行所　株式会社求龍堂
東京都千代田区紀尾井町三―一三文藝春秋ビル九階
© Printed in Japan

目

次

第七感覚について……7
清音と濁音……23
「し」と「たる」の問題……43
中勘助氏の『ダイバダッタ』……62
知らざればなり！……80
流行語㈠……100
流行語㈡……116
流行語㈢……137
聯想㈠……154
聯想㈡……172
聯想㈢……190

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

日本人と飜訳……206
ああ！　木下杢太郎先生！……226
澤東綺譚（一）……247
澤東綺譚（二）……268
不遇の人鷗外（一）……288
不遇の人鷗外（二）……306
不遇の人鷗外（三）……328
不遇の人鷗外（四）……351
不遇の人鷗外（五）……373
後記……402

不遇の人　鷗外

装画・装幀　小堀四郎

装画中のモノグラム「R・M」は本名森林太郎の頭文字であり、鷗外がドイツ留学中、初恋のドイツ女性より贈られたハンカチに刺繍されていた。

第七感覚について

人間の感覚ほど不思議なものはない。嘗て私は、新漢字、新仮名づかひに就いて書き、それは人間の、視覚と、聴覚の、両方を無視した悪制度だ！　と書いてゐる。

気がおつきになつたか？　どうか？　本当は正漢字、正仮名づかひで書きたいのだけれど、私は今、新漢字、正仮名づかひで書いてゐるのだ。

昨年この出版社から発行せられた「追憶から追憶へ」と云ふ題名のその本が、新漢字、正仮名づかひで、これはその出版社の私に対し許容して下さるギリギリの御好意と感じられたから、その時と同し様式で！　と自ら申出たのである。

人間の感覚！　視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、大体これにも昔から順序があるのではないか？　なんとなく上の方から、目、耳、鼻と云ふ順序で書いたのだが、私は学のない人間だからよく解らない。これを五感と云ふらしく、それ以上の感覚と云ふと、ヴェテランの刑

事などの第六感で、私は如何なる職種でもいい、その道のヴェテランが好きなのだ。理由は後で書く。

昔の人は五感で事足れり！　としてゐるやうで、第六感迄来てゐながら、それ以上のものがあるのに全く気がついてゐない。七感である！　七環と誤つては困る。あれは環状七号線。

私の云ふのは第七感、即ち倫理感覚である。倫理なんて修身みたいで古臭いと云ふなら潔癖感覚でもいい。精神的潔癖感覚と云へばなほいい。現代の人々に何が一番欠けてゐるかと云ふと実にこの精神的潔癖感覚なのである。

先づ第一に問題にしたいのは、死者に対する「誹謗」、「中傷」である。辞書を引くと、誹謗とは、そしり、ののしること、悪口を云ふことと書いてある。今年の、と云ふことは昭和五十六年、わかい人で西暦でなくては感じが出ない！　と云ふなら一九八一年六月号の雑誌、「新潮」に、私がこれ迄全く知らない谷澤永一と云ふ人物が、亡父鷗外の悪口を書いてゐる。四月号にも書いてゐるさうで、幸か不幸か私はそつちの方は気がつかなかつた。今度は八月号に書くと云ふ予告が出てゐる。刮目して待て！　と云ふところであらう。

谷澤永一なる人物の年齢を、私は即座に中年から、初老！　と断定した。首を賭けてもいいと思つた。七十二歳の私は、主としてわかい人々に好感を抱いてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

人間十歳代、二十歳代、せいぜい三十歳代迄は、自分の才能に対して或る種の自信が持てる。つまり愚かであるわけで、私も絵を描けば、ゴッホくらゐ軽く行けると思つてゐた。

たしかゴッホは、夏草の生茂る中を、後姿を見せ、男が一人向うの方へ歩いて行くところを描いてゐて、絵を見てゐるだけで、熱い陽ざし、草いきれ！　と云ふのか？　あの新鮮で、鋭い草のかほり、足の下に踏んで行く乾いて、スッキリした夏草の、サワサワゆれる微かな音迄ききとれるやうな気がした。さうしていざ、実際に描いて見ると、遠くへ行く筈の草原が、どうしても向うへ行かないのだ。夏の午後の光線も、草いきれも何もあつたものでなく、スケッチ板に緑の絵具が醜くベタベタ塗られてゐるだけなのである。

天馬！　空を征く感じが忽ち奈落の底にまつさかさまなのだが、とにかく白昼に夢を描く幼さ、よく云へばうひうひしい感情をまだ抱いてゐる。それが四十歳も過ぎ、五十歳の声も聴くとなると、さすがに自己の才能に対する限界が見えて来る。

つまりかしこくなるわけで、谷澤永一氏なども逸早く自己の才能の限界を感じとり、到底、普通の手段では世に出るチャンスもつかめないとなると、人々の関心！　と云ふのか？　耳目を欲てるに十分な鷗外の、それも悪口を云ふに限ると考へたらしい。

早速私は、日本文芸家協会が昭和五十二年、即ち一九七七年に発行した『文芸年鑑』を調

べて見た。谷澤永一！　あつた、あつた。昭和四年のお生れ！　正にそのものズバリ、五十二歳である。関西大学教授、日本近代文学館会員、ナアルホド！　と云ふのは、彼の擁護、つまりかばひ、まもり奉つてゐる明治時代の文士、石橋忍月氏は実は日本近代文学館理事山本健吉氏の御尊父に当るのであつた。

石橋忍月氏の御子息が山本健吉氏では変だが、筆名か？　御養子にでも行かれたのであらう。この山本健吉氏に私はなんの私怨も抱いてゐない。念の為。亡父鷗外が、山本健吉氏の御尊父、石橋忍月氏と一世紀くらゐ以前、つまり百年くらゐ前に文学上の論争をしたのは有名な話で、不勉強で、頭の悪い私は一世紀前の文学論争など全く興味なく、従つてまだ読んでゐない。

ただ学者と云ふ人種は実に暇なものだなあ！（これは自分が無学なのでひがんでゐるのかも知れない）とつくづく感嘆した。

この世には因縁と云ふものがあり、縁と云ふとなんだか恋愛とか、結婚とか聯想するけれど、決してそんなものだけではない。書物にでも、植物にでも、土地にでも、なんでもかんでも縁のあるのと、ないのとある。

御縁と云へばその日本文芸家協会の私は会員のはしくれで、それ故、谷澤永一氏とは、同

し会員同志になるわけだ。

元来私は何かの会員になりたい！　と云ふ気持皆無の人間で、それが日本文芸家協会の会員であるのは誠に不思議である。

或る年、つまり三、四年くらゐ前と思ふが、一日、突如として、その日本文芸家協会の会長？　の、江藤淳氏と、理事長の山本健吉氏連名の印刷物が来て、私に会員になることをお薦めします！（たしかこんな文章であつたと思ふ。かう云ふ種類の印刷物をとかく私は軽視し、何処かへしまつて、つまり古手紙の束の中に埋もれさせてしまふのだが、決して失くしたわけでなく、第一、手紙類を焼却する習慣がないから、今でも我家の古手紙の詰まつたダンボオルを丹念に調べれば出て来る筈である。）青天の霹靂とはこの事で、私は非常に困惑した。何かの会に入会するには入会金と云ふものが必要なので、才能に乏しく、従つて原稿の御依頼など甚だ稀れである私は、慢性金欠病患者の為、かうした予定外の出費に対し、恐怖に近いものを感じるのである。

終戦後間もない頃と思ふが、それこそどなたの御推薦！　か知らないが、私は日本エッセイスト・クラブ会員にされてしまひ、年会費を払ひ、しかも読みたくもない随筆を読まなくてはならない義務を負はされ、一年だか、二年後だか忘れたが、貧困の為、会費が支払へま

せんので会員を御辞退しますと云ふ通知を出し、やつと退会させて頂いたのである。今思ふと、驚くべき低額の会費で、それでも当時の私には支払へなかつたのである。

実は日本文芸家協会から昨日手紙が来て、年会費支払要請の通知があり、憂鬱になつてゐるところだ。

世の中には何事に於てもいい面と、悪い面の二つがあり、日本文芸家協会の会員にさせられたお蔭で、勿論有料だが、私は『文芸年鑑』を求めてあり、それで谷澤永一氏の御年齢、御略歴等、たちどころに知ることが出来た。ついでと云つては失礼だが、理事長の山本健吉氏のところを見ると、本名石橋貞吉氏、ナアルホド！　明治大学教授、日本文芸家協会理事長、芸術院会員、日本近代文学館理事、日中文化交流協会理事、日本ペンクラブ理事、俳文学会員、御著書として『芭蕉』と出てゐた。たしか大文豪幸田露伴翁と同し御研究題目だ。偉い先生なのである。

谷澤永一氏との関聯と云ふか？　共通点をなんとなく比較しつつ調べて見ると、彼の方は省略してあるが、私と同じく日本文芸家協会会員であり、同時に山本健吉氏と同し日本近代文学館会員でもある。

江戸の敵を長崎で討つ！　などと云ふ言葉もあるやうだが、それは同時代の話。なにしろ

一世紀も前の文学論争を蒸返して、今日論じるのも、思へば御苦労さまとでも申上げたいやうなもので、これがやつつけられる方も、擁護せられる方も、いづれも死者！　となると、谷澤永一氏、第一張合ひがないのではないか？　と他人事ながら心配になる。それよりも何よりも、擁護して頂ける石橋忍月氏の方も、死人に口無し、感謝の意をお伝へするわけに行かず、まして亡父は、悪意ある臆測、邪推、暴言、非礼の数々をあびせられながら、弁解も反駁も不可能な立場にあることを谷澤永一氏はいつたい一瞬にしてもお考へになつたことがあるのであらうか？

十二歳や、十三歳の少年で、ソンナコト、カラスノカッテデショッ！　とでもやられれば、笑つて引退がる度量くらゐあるつもりだが、相手は不惑も疾の昔に過ぎ、初老に達した御年配である。

そればかりではない。これが単なる市井の人、文学に全く縁のない政治家とか、実業界のかたとでも云ふのなら、また話は別だ。

苟くも、文化国家、日本の将来を担ふ大学生の指導者たる大学教授で、日本近代文学館会員の肩書を持たれる御立派なセンセイだから余計腹が立つ。

第七感覚完全喪失症先生である。

さて、六感、七感どころか、単に五感に類するものでも、例へば、漢字で薔薇！　と書くと、柔らかくいい匂ひのする薄い花弁が、幾重にも複雑にかさなり合つて、なんとも云へない美しい形が彷彿と眼に浮かぶ。それを、ばらはまだしも、片仮名でバラとやられると、どうしてもバラバラ事件を聯想せずにはゐられない。

そもそもばらと云ふ音はたいして美しいものではない。それを訳詩などで、

「君に捧げし花薔薇……」

などとするとまことに優雅である。美しい少女など、薔子と命名したらどんなに素敵であらう。

つい先頃、私は丸善の「學鐙」四月号に一文を載せ、その中にプルウストの言葉として、

「しかしぼくはね、あれが大好きで、バラ色や白いあの花について一文を書いたほどだよ。〈以下略〉」

と記した。何故バラ色としたか？　しかも大好きなプルウストの言葉なのである。

つまり私が「學鐙」にこの文章を書くことが出来たのは、仏文学者、三輪秀彦氏訳文のお蔭である。それ故訳文をその儘載せる時、自分勝手に訳文を変へたり、仮名づかひを変へることは礼を失することになるのではないであらうか？　私はバラ色と書き、用ひたい薔薇色

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook